

武蔵野日曜集会

大祭司の祈り

――ヨハネ伝第17章――

1985年2月10日(武蔵野)

小池辰雄

無における具体性 絶対者が相対の関係に入る 「永遠の生命を与えしめん」 一の世界 聖書
平伏会 彼らは汝の有^も 勝利と歓喜の霊 聖化 四位一体 聖霊の執成しの祈り 大祭司の務
め

【ヨハネ17】

「イエスこれらの事を語りて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う『父よ、時来れり、子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。』² 汝より賜わりし凡ての者に、永遠の生命を与えしめんとて、万民を治むる権威を子に賜いたればなり。³ 永遠の生命は、唯一の真^{まこと}の神に在^あす汝と汝の遣^{つかわ}し給いしイエス・キリストとを知るにあり。⁴ 我に成さしめんとて汝の賜いし業を成し遂げて、我は地上に汝の栄光をあらわせり。⁵ 父よ、まだ世のあらぬ前^{まへ}に汝と偕^{とも}にもちたりし栄光をもて、今御前にて我に栄光あらしめ給え。⁶ 世の中より我に賜いし人々に我、御名^{みな}をあらわせり。彼らは汝の有^もなるを我に賜えり、而して彼らは汝の言^{ことば}を守りたり。⁷ 今かれらは、凡て我に賜いしものの汝より出づるを知る。⁸ 我は我に賜いし言を彼らに与え、彼らは之を受け、わが汝より出でたるを真に知り、なんじの我を遣し給いしことを信じたるなり。⁹ 我かれらの為に願う、わが願うは世のためにあらず、汝の我に賜いたる者のためなり、彼らは即ち汝のものなり。¹⁰ 我がものは皆なんじの有^も、なんじの有は我がものなり。我かれらより栄光を受けたり。¹¹ 今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我は汝にゆく。聖なる父よ、我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。これ我等のごとく、彼らの一つとならん為なり。¹² 我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。そのうち一人だに亡びず、ただ亡びの子のみ亡びたり、聖書の成就せん為なり。¹³ 今我なんじに往く、而して此等のことを世に在りて語るは、我が喜^{よろこび}悦を彼らに全からしめん為なり。¹⁴ 我は御言^{みことば}を彼らに与えたり、而して世は彼らを憎めり、我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。¹⁵ わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、惡より免^{まぬが}らせ給わんこ



となり。¹⁶ 我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。¹⁷ 真理にて彼らを潔め別ち給え、汝の御言は真理なり。¹⁸ 汝われを世に遣し給いし如く、我も彼らも世に遣せり。¹⁹ また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ真理にて彼らも潔め別たれん為なり。²⁰ 我かれらの為のみならず、その言によりて我を信する者のためにも願う。²¹ これ皆一つとならん為なり。父よ、なんじ我に在し、我なんじに居るごとく、彼らも我らに居らん為なり、是なんじの我を遣し給いしことを世の信ぜん為なり。²² 我は汝の我に賜いし栄光を彼らに与えたり、是われらの一つなる如く、彼らも一つとならん為なり。²³ 即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり、是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼等をも愛し給うこととを、世の知らん為なり。²⁴ 父よ、望むらくは、我に賜いたる人々の我が居るところに我と偕におり、世の創の前より我を愛し給いしによりて、汝の我に賜いたる我が栄光を見んことを。²⁵ 正しき父よ、げに世は汝を知らず、然れど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給いしことを知れり。²⁶ われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。これ我を愛し給いたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん為なり』

● 無における具体性

今日は「大祭司の祈り」という題です。17章は三段階になっていて、1節から5節は、特に神とキリストの非常に深い間柄の祈りです。6節から19節が、大体、弟子との間の事柄の祈り。それから、20節から終りまでが一般の信者たちへの祈りと、こういうようになっているようです。

「イエスこれらの事を語りはて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う」

「言い給う」というのは「祈り給う」ということ。キリストの祈りは、「目を挙げ天を仰ぎて」という。天を仰いで目を開いて、非常に明るい。教会なんか行くとよく、下を向いてしまつて、手も合わせないで膝の上に置いたりして、もそもそしている。キリストのは天を仰いで目を開いて大声で祈る。

『父よ、時来れり、子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。』

非常に相互関係です。私たちは「主さま」と言つて祈りますが、キリストは「父よ」と非常に簡単です。キリストはヘブライ語ですから、「アーブ」とか「アッバー」でしようね。ヘブライ語の「父」「アーブ」という字は素晴らしい字です。ABCのABなんだ。パウロがどこかで、「アバ、父よ」なんて書いているが、あれがそのヘブライ語です。呼びかけるから、「アッバー」の方が音が強い。

さあ、「父よ」と言われても困るよね。どこかに、ミケランジェロが描いたようなお爺さ



んでもいるかと想う。ところが、キリストは非常にはつきりと「父よ」と仰る。これが躓きになるんです、普通の人に、特に仏教信徒には。お伽話みたいで。

「そんなのはどこにいるか？」

なんていうわけです。イソップ物語でも狐やなにかがしゃべっている。グリムにもある。我々の人間関係では、父母というのは縦の関係で非常に具体的です。本当の信仰の世界は非常に具体的です、観念じゃない。だから、キリストは「父よ」と言う。「絶対者よ」なんて言わない。哲学では「絶対者」なんて言うけれども。絶対どころではない。キリストにとつては非常に相対なんだ、父は。自分は子である。

「父が母でなくて子が生めるか」

なんて、そんなバカなことは考えない。マリヤから彼は出てきた。けれども、父はヨセフではない。そういう非常に人格的にして霊的なんだ。しかも、具体的でありながら形はなしていない。絵に書こうとしたって書けない。形のない具体性と謂うんだ。人間はそれではない。絵に書こうとしたって書けないです、観念では。絶対者では。

最後は、無における具体性になる。これが「父よ」です。私たちにはキリストは非常に具体的だから。「父よ」と祈ったっていいですよ。けれども、私は「主さま」というのが一番具体的だから、「主さま」と言って祈る。福音書の「主さま」だ。もう大変なものですよ、福音書のキリストは。説明なんかできない。集会なんかいらないんだ。聖書を読んでいけばいい。からだで読む。

●絶対者が相対の関係に入る

「父よ、時が来ました」

と。この「時」は「カイロス」ではなく、「ホーラ」という字が使っている。いよいよ十字架にかかる時、復活する時、昇天する時。「十字架・復活・昇天」は離すことができない関係です。だから、「栄光」という言葉が使っている。十字架で終いだったら、栄光にならない。十字架・復活・昇天。エリヤやエノクが天界に行ったが、それよりもっと凄くキリストは天界に行けるひとなんだ。けれども、キリストは十字架を通らなければならない。これがもう比較を絶するところの事態です。

私の今度の詩にも最後に「絶する」という言葉が出てくるけれども、あれは「超絶する」という意味です。それを乗り越えている。

「死は百行を絶する」

というのは、死は百の行為を超絶したところの事態であるということ。この「絶する」という言葉は素晴らしい言葉だ。神さまは絶対者であると同時に我々に対してもの凄い相対者である。神さまとの相対は、つかなくたら、絶対者なんて謂ったって、ただかけ離れてしまつてどうにもならない。もう切つても切ることのできない相対性です。絶対者がそ



の相対の関係に入るから、ありがたい絶対者なんだ。しかも、それは相対の中に入れたときには、相対は具体的でなければ入れない。その相対を執り成すものはキリストなんだ、聖霊なんだ。神さまとの相対関係を執り成してくださるのはキリストであり、聖霊である。だから、キリストを大祭司と謂う。祭司は執り成すひとだからね。我々はまた、人のために執り成すから、小祭司だ。我々も祭司です。マルチン・ルターが

「万人祭司」

と言ったのは、別に坊さん階級は要らない。みんなが祭司である。キリストはまた大預言者である。我々一人びとりがまた預言者にならなければダメです。クリスチャンというのは預言者でありまた祭司であるんですよ。無教会はどっちかというところ、預言者型が多かったね。内村鑑三、藤井武。祭司型は少ない。少ないと言っても、いたかと思うくらいです。

その点で、なぜ、祭司型が少ないかというと、聖霊の事態がはつきりしないから、祭司型が少ない。祭司の本当の内面は聖霊なんです。話はえらく深いところに来てしまったけれども。

「聖霊、言い難き呻きをもって執り成し給う」

という。ローマ書8章26節。我々は人のために執り成す。御霊の力、御霊の中で。それは本当の、人のために祈る祈りが無教会ではどうも足りなかったようだ。だから、無教会は「祭司」という言葉が嫌いなんだ、「坊さん」なんて言う。いわゆる祭司でないんだから、この祭司は。本当の意味の祭司だ。本当のクリスチャンというものは預言者と祭司との両面がなければダメなんです。キリストは正に両面を100%にお持ちだった。大預言者であり、大祭司であった。またそれを越えたひとだ。キリストを入れると、自然に預言者になり、祭司になる。だから、御霊の世界は凄いと云うんです。もう結論みたいなのを言ってしまったな、今日は。

●「永遠の生命を与えしめん」

「子が汝の栄光を顕さんためだ」

と。というのは、

「私が十字架にかかり、復活し、昇天すれば、そのことがあなたの栄光を顕すことになります。それだから、私の栄光も顕してください、具体的に。」

というのと同じことです。「汝の栄光を顕す」というのと、「自分の栄光を顕す」というのも結局同じことなんです。別にちがったことではない。

² 汝より賜わりし凡ての者に、永遠の生命を与えしめんとて、万民を治むる

権威を子に賜いたればなり。

これは凄い内容だ。「ということ」は「という字が入ってます」。

「あなたからいただいたところのすべての者に、即ち自分を信じた者に永遠の生命



を与えしめんとて、万民を治むる」

と言ったら、これはもう天界に行っている、昇天してからの話です。キリストは地上では万民を治めないんだ。

「永遠の生命を与えしめん」

という。彼自身が永遠の生命ですから。死んでも死なない生命を、いわゆる相対的な生死を越えた生命を与えようというわけで、あなたの御許に行ってしまうてから、万民を治める権威を――王の王という。地上ではキリストは、権威はもちろん持つてらっしゃったです、もちろん持つてらっしゃったけれども、キリストの言葉や業にはもともと素晴らしい権威があるんだけど――天界において万民を治めるその権威を子に賜いたればなりと。

3 永遠の生命は、唯一の真の神に在す^{いま}汝と汝の遣^{つか}し給いしイエス・キリスト

とを知るにあり。

さあ、それが永遠の生命かと思ってしまうね、この言葉は。これはヒルティが好きな言葉なんです。非常になにか客観的なものの言い方をしているな。「私を」と言わないで「イエス・キリストを」なんて言っている。こういう言葉があるものだから、

「主の祈りの中には、後から教会が付け加えた言葉がある」

なんて学者が言うわけだ。

けれども、いいですか、目を挙げて大きな声で祈ってらっしゃるときに――人が聞いているんだから、キリストはこの場合に――「イエス・キリストを」と仰るのは何も不自然ではない。学者が余計なことを考える。「このイエス・キリストを」と、「この」があったっていいわけだ。

「汝の遣わし給いし」

と、よくキリストは仰る。遣わし給いし者、遣わされたる者。使者である。お遣いなんだ。

● 一の世界

「これを知る」と言う。永遠の生命は「知る」にあるという。知って、永遠の生命が来るかというんだ、知るだけで。だから、この「知る」という字が非常に深い内容の字です。ヘブライ思想の「知る」という字は、「受けとる」ことなんです。「知る」というのは、深い交わりの世界です。全存在的に交わる。

「私がお前だか、お前が私だか、わからない」

という、そういうような知り方が「知る」なんです。その人の名前を呼べば、もう全存在がグッと来るようなのが、それが本当の「知る」ということ。友情関係はそういうった知り方でなければダメだ。

「どうだ、こどうだ」



なんて分析してない。渾然として受けとっている。

「悪いところがあつたつて、欠点があつたつていいよ。全存在的に引き受けた」

というような知り方が本当の「知る」ということ。いわゆる知的な人間はすぐ分析する。

「これはこうだけれども、こういうところがこうだ」

なんて。矛盾なんかあつたつていいよ。本当の「知る」というのは、相手を信じ愛することです。信じ愛することと「知る」ことは同じことなんです。知る、信ずる、愛する、これはみんな同じことです。信・愛・知、これは信仰の世界では同じことです。だから、

「本当に神さまを、私を受けとつて信じ愛し知つたらば、そのときに直ちに永遠の生命の世界だ。永遠の生命を受けとつていないような知り方は本当の知り方ではない」

というわけだ。それでもうはつきりするでしょ。キリストを――マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を本当にからだで読むというところ――これが知ることであつて、同時に永遠の生命の中に入つてしまうこと。ちつとも難しくない。

3 永遠の生命は、唯一の真の神に在す汝と汝の遣し給ひしイエス・キリストとを知るにあり。

「唯一の真の神」という。全くそうです。キリストに自らを現した神さまは、「唯一の真の神」です。また、その「唯一の真の神」を体現したのはキリスト。だから、イエス・キリストを知ることと神を知ることとは、またこれは一つだ。

この17章は、「一つ」の世界だからね、始めから終りまで。「一の世界」です。「一の世界」と題した方がよかったかもしれない、「大祭司の祈り」なんていうよりも。

「0=1=8」

こんな方程式はない。けれどもそうなんです。

「無=一=無限無量」

まあ、私の詩はおもしろいよ。「おもしろい」なんていう言葉では表わせないんだ。もう私は三百行書いてしまった。早いよ、スピードが。もの凄いよ。私は書いていて、異言になりそうだ。だけれども、見せないから絶対に(笑)。

「永遠の生命は、唯一の真の神に在す汝と汝の遣し給ひしイエス・キリストとを知るにあり」

と。これでもうはつきりわかったですね。なるほど、この「知る」というのはこんな言葉かと。

そして、毎日、私は『一日千年』(後に第十巻『聖書は大ドラマである』に改題、1988年刊)も書いているんだからね。毎日、寝る前に。それで365日でちょうど出来てしまう。だから、「詩」(第八巻『詩歌集』1986年刊)と「随筆集」(第九巻『感想と紀行』1987年刊)と『一日千年』はもう今年中に全部、内容が出来てしまう。



『旧約と新約』(後に『キリスト告白録』として1999年から順次刊行)はもうそこにたくさんあるからね(録音テープのこと)。もう何巻でも出来る。まあそんなことはしませんけれどもね。だから、百年生きたって、まだまだ仕事がいっぱいあって困るんだよ、僕は。この福音のためには、大いに協力してくださいよ、皆さんそれぞれの仕事をしながらね。

「永遠の生命は、唯一の真の神に在す汝と汝の遣し給いし我、イエス・キリストとを知るこれなり。アーメン」と。

●聖書平伏会

⁴ 我に成さしめんとて汝の賜いし業を成し遂げて、我は地上に汝の栄光をあ
らわせり。

もうやつちやつたんだ。

「もうはつきり、さんざんいたしました。御言を伝え、御業をいたしました。もうわがこと終れりです。これから十字架にかかります」

というわけだ。だから、十字架の上で

「わがこと終れり」

と言われたでしょ。もうさんざん、栄光をお願いしましたと。盲人は目があき、聾者は耳が聞こえ、跛者は立ち、癩病人は癒され、死人は甦る。大変なひとだ。天国を現じたんです。天国の予表をやつてしまった。イザヤ書35章を地で行った。

そのキリストの前に平伏さないでどうするんですか。平伏さないから、みんな、聖書の中に入れないんだよな。「聖書研究会」なんて、何をぬかしやがるかと。私は研究会なんか大嫌いだ。研究で入れるかと。「聖書平伏会」と言うんだ。

「降参しました!」

と。降参したら、キリストが

「さあ、入れてやるぞ」

と。降参しなければ、入れてくれない。

⁵ 父よ、まだ世のあらぬ前に

「アブラハムよりも前」どころじゃない。「世のあらぬ前に」とある。創造以前に。

汝と偕にもちたりし栄光をもて、今御前にて我に栄光あらしめ給え。

凄いね。こんなことを言ったら、キリストでなければきちがいだよ。御言自身にも凄権威がある。桁が、次元がちがう。こういう御言を読んでいたら、あなた方はどうなんですか、私なんかすぐグーッときちやうんだよな。もうキリストの中に自分を投げ入れなければ、とてもやりきれない。こういう御言を聞いていると。こっち側に坐っていて信じているのではない。投げ入れるんだ、自分を。



少し風邪気味でもね、こういう集会にやってくれば、治ってしまうんだよな。

「今日はちよつと調子が悪いから、家で寝てましよう」

なんて。なおさら悪くなる(笑)。そういうもんですよ。そういう気合のかかっている集会だからね。

●彼らは汝の有^{もの}

「世の創造以前にあなたと一緒にいました。その栄光をもって我に栄光あらしめ給え」

と。

6世の中より我に賜いし人々に

この世の中から私に選んでくださったところの人々に、

我、御名をあらわせり。彼らは汝の有^{もの}なるを我に賜えり、而して彼らは汝の言を守りたり。

弟子たちは、まあ一応守った。まだ本式ではないんだけど、一応キリストは認めた。

「キリストのところに行って来るのは神さまが選んだ」

というわけです、キリストは。

「あなたがお選びになったから、彼らはやってきました。私が選んだではありません。せん」

というわけだ。我々も神さまに選ばれて、キリストのところに行って来た。不思議な摂理だね。

7今かれらは、凡て我に賜いしものの汝より出づるを知る。

そういうことも分かってきましたと。まだしかし、本当じゃないですよ。大体、こんなだよな。本当に分かるのは、聖霊が来てからの話だけれどもね。

8我は我に賜いし言を彼らに与え、彼らは之を受け、わが汝より出でたるを真に知り、なんじの我を遣し給いしことを信じたるなり。

一応受けた。みんなこれは一応なんだ。一応は信じた。だけれども、本式じゃないから、躓くよ。みんなまた散り散りになってしまう。そして、

「キリストは十字架にかかってしまった」

なんて言って失望してしまう。復活したって、マグダラのマリヤが言っても、始めは怪訝^{けげん}な顔したり、疑ったり。何信じているかと。キリストは善意的に解釈してらっしゃるんだ、これは。

9我かれらの為に願う、わが願うは世のためにあらず、一般の世の人ではない。

汝の我に賜いたる者のためなり、



ということは、彼らが本当に離れないようなしつかりした弟子になるように、まだ仮弟子だけれども、本弟子になるようにお願いしますよ、というわけだ。

彼らは即ち汝のものなり。¹⁰ 我がものは皆なんじの有、^{もの}なんじの有は我がものなり。我かれらより栄光を受けたり。

その通り。あなたと私は一つだから。

「父と我とは一つなり」

だからね。

「あなたのものは私のもの。私のものはあなたのもの」

と。「もの」というのは、「属する」という意味です。

「今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我は汝にゆく。聖なる父よ、

ここに「聖なる」が付いているね。

我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。

「わが名に」ということをさんざん仰った。今度は、「汝の名において」と神さまにむかつて言っている。

「汝の御名の中に彼らを守る」

と書いてある。これはいい訳です。世になずんではダメだから。

「世の中にいるけれども、しっかりと、世に化せられないようによろしく願います」

と。いろんな誘惑があるから。日本でも

「武士は名を重んずる」

と言う。本当の実名の中にと。

「神の名をみだりにあぐべからず」

というのは、名というのは尊いからね。だから、「ヤーヴェー」という名を呼ばないで、「アドナイ」「わが主」と言って読み替えた。そのうちに、「ヤーヴェー」が何と読むか忘れてしまったなんてなことになってしまった。イスラエルの神さまの名前は「実在者」という名前だからね。「ハーヤー」「存在する」という字からくる。実在する。あるいは、そこに現象する意味も持っている。「ザイン」(在る)と「ヴェルデン」(成る)の両方の意味を持っている。在りながら、また展開してやまない在り方だから、それが相手を持つと、創造してやまない在り方になってくる。

これ我等のごとく、彼らの一つとならん為なり。

あなたと私は一つのように、彼らも一つとなるようにと。「彼らも一つ」というのは、「我々と一つ」という意味と、「彼ら相互の間の一つ」と、両方あるでしょうね。だから、これは「一」の世界です。



●勝利と歓喜の霊

¹² 我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。そのうち一人だに亡びず、ただ亡びの子のみ亡びたり、聖書の成就せん為なり。

ユダなんかそれだね。サタンに捕らえられてしまつてね。ユダははじき出されて13番目になるわけだ。

¹³ 今是我なんじに往く、而して此等のことを世に在りて語るは、我が^{よろこび}喜びを彼らに^{まった}全からしめん為なり。

「私はあなたのところへ行く。しかし、彼らはそれがわからない。それで今、あらかじめ世にあつて語るのは、我が喜びを彼らに全からしめんためなり。私はあなたのところに行くのがうれしくてしょうがない。ただ、うれしい前に悲しみがある。十字架というこの苦杯は飲みたくないけれども、仕方がない」

と。これがゲッセマネの祈りになるわけです。復活して、喜んだけれども、まだダメです。本当の喜びは聖霊が来てからです。

「この喜びを奪うものなし」

と、こないだやつたですね。勝利と歓喜の福音。あの歓喜は喜びの霊、聖霊です。愛の霊、喜びの霊、聖霊です。

¹⁴ 我は御言を彼らに与えたり、

あなたの御言をね。キリストは自分が語るとは思っていない。だから、無言者、言が無い。神の御言を与える。

而して世は彼らを憎めり、

一般の、私を受けとらない人たちは彼らを憎んだ。

我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。

本当は世を救うために来たのに、その救いを受けとらないで、反抗して、背いているんですよ、嫌うんですよ。しょうがない。ヨハネ伝3章16節には、

「¹⁶ それ神はその^{ひとりご}独子を賜うほどに世を

背いている世を、

愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」

と書いてある。世を愛したのに、その愛を受けとらないから、これは滅びにいく。受けとる人は永遠の生命に入る。

●聖化

¹⁵ わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、惡より免^{まぬが}らせ給わんことなり。



なにも世からとりあげて、そして「修道院に入れ」というのではないと。世の中にいいんだけれども、ただ、そこで

「悪より免らせ給わんこと、罪に勝ち誘惑に勝ってもらいたい、そういうようにしたい」

と。また、

「彼らを通して世を救わんがためなり」

くらいのことを仰つればいいんだけれども、そこは書いてないな。

¹⁶ 我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。

あまり、クリスチャンが

「世のものでない」

なんて言つて、

「私たちは彼らと違うんだ」

なんて思い上がったら、とんでもない間違いだ。そういう気持を持っていると、世の人が、

「何だ、あいつらは。自分たちは何か特別なものだと思つてやがる」

なんて、今度はまた憎まれる。それは、憎む方がまた間違っている。また、憎まれるようなことになるのも間違っている。「さすがは」と言つて、世の人たちがその中に入ってくるような在り方になつていなくてはね。

ただ区別するためではダメだよ。ユダヤ人はひよつとするとその角度が強いんです、その別つ方が。「聖別される」という言葉がある。私はあの言葉はあまり好きではない。

「聖別される」

と言つて、なにか

「私たちは世の中とちがうんだ」

なんて思っている。そうじゃないよ、同じ罪びとだよ。救われたのは、世の人たちを救うためにあるのですね。自分たちがどん底に立たなかつたら。

パリサイになるんです、世を見下したら。パウロが始めはそうなんだ。見下していた。人を見下しているようではダメだ。キリストが「僕」と言われたのはその角度です。クリスチャンの自由は世を、人を愛するため、隣人愛のためです。

この主の祈りは、ちよつとその面が足りないと言つたらわるいけれどもさ。とにかく、自分を受けとつたものはしつかり、ひっくり返らないようにということをキリストは熱烈に仰つていらつしやる。その面では仕方がないけれども。

¹⁷ 真理にて彼らを潔め別ち給え、

そうだろ、この世から潔め別ち、

汝の御言は真理なり。¹⁸ 汝われを世に遣し給いし如く、我も彼らも世に遣せり。

それならいいです、この言葉は。遣わしたのは、救わんがために遣わしたので、私も彼ら



を遣わすのは、彼らを救わんがために遣わすので、それでなかったら、世から出てしまえばいいんだから。遣わしたのは、彼らもまた神の民にするためであつて、それを「聖別」というなら、「聖別」と言つたつていい。けれども、何か我々自身を「聖別」されたつて、「聖い」という字をあまり使いすぎてな。

¹⁹ また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ真理にて彼らも潔め別たれん
為なり。

「潔め別つ」ということは、「聖別」というよりもむしろ、「聖化」と言つた方がいいと思う。化する。

「栄光より栄光に行つて、ついにキリストの姿に化するなり」

という、パウロが言つたあれです。そしてまた、人をも聖化させていくわけだ。霊的な化学変化を起こさせる。

●四位一体

²⁰ 我かれらの為のみならず、その言によりて我を信する者のためにも願う。

「彼ら」と言つたのは特に弟子たちで、今度は、「我を信する者」というのは一般のことになる。20節からはちよつと範囲が広がる。

²¹ これ皆一つとならん為なり。父よ、なんじ我に在し、我なんじに居るごとく、
彼らも我らに居らん為なり、是なんじの我を遣し給いしことを世の信ぜん為
なり。

これははつきりしているね。これが四位一体だ。

「神・キリスト・聖霊・我、これがみんな一つとならんがためである」

と。それで、いわゆる直弟子も、他の平信徒も、そんな区別はないです、全部同じ。役割はそれぞれ違つたつていいよ。役割は違わなければならぬね、同じことをしたらしょうがない。役割は違つても、キリストとの関係は一つ。

これがまた、間違つた民主主義が秩序を乱してしまつて、もう何でもかんでも同じだと思つて、小さいのがいい気になつたりしている。とんでもない。「長幼序あり」という。師弟の関係あり、親子の関係あり。神の前に人間としては一つです、そういう意味においては、信仰においては、地上の関係は全部乗り越えた兄弟姉妹ということです。

²² 我は汝の我に賜いし栄光を彼らに与えたり、

義を貫き愛に生きる。

是われらの一つなる如く、彼らも一つとならん為なり。

この「一つ」にする、その媒介は一体何かというと、もう言うまでもなく、聖霊です。御霊です。御霊でなければ一つになれない。ただ「信仰」なんて言つたつてダメです。信仰箇条ではないんだから。



「これこれのことを信じれば一つだ」

なんていうことではない。御霊、聖霊です。

「聖霊は一つにして、賜物^{たまもの}はさまざまである」

と、コリント前書12章でパウロが言った。

²³即ち我かれらに居り、汝われに在^{いま}し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり、繰り返し言っているね。しかし、繰り返しても非常に大事な繰り返しです。

「我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり」

もうこれは円環関係です。円現するわけです。全部、円の中に入ってしまう。

是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼等をも愛し給うことを、世の知らん為なり。

このことを本当に世が知れば、世もまた愛の中に入るわけです。本当に知れば、世もまた入ってしまうんだけど、

「ああ、そうか」

くらいではダメだ、この「知る」は。単なる認識ではダメなんだ。

●聖霊の執成しの祈り

²⁴父よ、望むらくは、我に賜いたる人々の我が居るところに我と偕におり、世の創^{はじり}の前より我を愛し給いしによりて、汝の我に賜いたる我が栄光を見んことを。

天界のことだよ。同じところに彼らも来て、見るようになりたいものだ。もう天界のことを言つてらっしゃるようだな、これは。

²⁵正しき父よ、げに世は汝を知らず、然れど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給いしことを知れり。

「この者ども」というのは、キリストの直弟子や近いところの人でしょう。あるいはもう少し広く考えたって、どっちでもいいですけれども。

²⁶われ御名を彼らに知らしめたり、復^{また}これを知らしめん。

「復^{また}これを知らしめん」とは何ですか。御霊によつて

「またいよいよ知らしめん」

ということ。「知らしめん」だけれども、本当に知るのは、「また」以後なんだ。これが「聖霊降臨」です。

これ我を愛し給いたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん為なり」

今度は、「愛」という言葉がはつきり出てますね。愛が彼らに居る。一つになるためには、この聖霊が在る。聖霊はまた、その質は愛だから。「愛が」というのと、「聖霊が」というのが同じことになる。御霊の愛が居る。「居る」だの何だのというのはみんな結局、愛の関係



ですからね。質的な関係です。空間的な関係ではない。

それで、何とかして「世を救う」ということまでは、この祈りでは言っていない。要するに、神と我、それから弟子たち、更には広い弟子たち、そこまでは。「世に遣わす」とか、「世の知らんためなり」という言葉が出てきますけれども、

「彼らが世をもひっくり返すために」

と、そこまでは仰っていない。

内村先生の「英和独語集」にこういう英文の文章がある。

「私は自分自身で祈りません。私は神さまに私に代わって祈っていただきます。霊なる神さまが私のうちに宿り給いて、私を通して神さまの御意を祈り求めること、ときには言い難き嘆きをもつて、それが本当の祈りであります(ロマ書8章26節)。哲学的には不可解であります。しかし、実験的には真理であります。

内村先生はよくこの「実験的」という言葉を使う。

この神さまがその子供のうちにあって、我らを通して神さまに祈り給うというのは、それは誠に私の祈りであります。なぜなれば、私が神さまに祈っていたくのであるからであります。そして、その祈りの内容が私の欲や望みではなくして、神さまの清き御意であるゆえに必ずその御前に受けとられ、きつと聞かれるのであります。自己を無き者とすることは、祈願をもって神にもの言つときにすら必要であります。私どもは神さまに、神さまが私どもに代わって祈ってくださるようにならなければなりません。」

特に聖霊のことを強くうちだしてはいないけれども、「霊なる神さま」ということは、まあ聖霊のことになるわけです。その点で、内村先生はかなりその火花の散っているところに入っているんですけれども。しかし、この内村先生の言葉は――内村先生は決して一様なことを言わない人で、いろんな角度を持っている人ですから、辻褄を合わせようとしたらダメです――これは本当に素晴らしい言葉です。即ち、聖霊の、神の執成(とらな)しの祈りなんです。特にここではキリストが出てこないけれども。

●大祭司の務め

「大祭司の祈り」ということ。出エジプト記28章1節に、

「アロンとその子らに祭司の職(つとめ)をなさしむべし」

とある。これが大祭司のもとなんです。ここに大祭司はどんな務めをするか、またどんなものを着るかということがたくさん出てくる。「エボデ」というのは大祭司の着物の名前です。どんなものかということが6節からずっと出てくる。こういうのがいわゆる大祭司なんです。レビ記16章にも出ている。ユダヤ人というのはそういうことは――まあこの宗教でもいわゆる宗教はそうだけでもね――大祭司の務めがずっと出てくる。



6節からおもしろいことが書いてある。「アザゼル」というのは何か荒野にいるところの悪鬼らしいよ。そのつとところに山羊を持つていつて、罪のお払いをするわけなんだ。妙なことをやつぱり昔の宗教はやつている。「罪祭」だの「燔祭」だの出ている。みんなこれは要するに、獣を焼いて、その煙を天に上げて、そして罪を焼き切るような気持ちなんです。「燔祭」というへブライ語はもともと「上げる」という字です。焼いて煙を上げてお払いをするという字から来ている。

「罪祭」もやつぱり獣を屠る。その一番原始的なのは創世記22章でアブラハムがイサクを献げようとしたでしょ。人身御供です。あれは非常に宗教の原始の姿です。要するに何か犠牲しなければ、罪は逃れられないということが旧約宗教の一貫したものだから、それを結局、キリスト自身がその罪の贖いの羔になってしまったんだからね。だから、イスラエル・キリスト教の姿は、いわゆる仏教の大慈大悲とはその点で根本的にちがう面を持っているわけです。

そういう旧約の、獣を焼いてどうのこうのなんていうのではダメだということをはつきり言っているのが、へブル書なんです。へブル書10章。へブル書というのは特にへブライ人に言っている。

「それ律法は来らんとする善き事の影にして真の形にあらねば、

律法の宗教ではないと。

年毎にたえず献ぐる同じ犠牲にて、神にきたる者を何時までも全うすることを得ざるなり。²もし之を得ば、礼拝をなす者、一たび潔められて復心に罪を憶えねば、献ぐることを止めしならん。³然れど犠牲によりて、年ごとに罪を憶ゆるなり。⁴これ牡牛と山羊との血は罪を除くこと能わざるに因る。

毎年そんなことをして何だと。

⁵この故にキリスト世に来るとき言い給う『なんじ犠牲と供物とを欲せず、唯わが為に体を備えたまえり。⁶なんじ燔祭と罪祭とを悦び給わず、⁷その時われ言う「神よ、我なんじの御意を行なわんとて来る」我につきて書の巻に録されたるが如し』と。⁸先には『汝いけにえと供物と燔祭と罪祭と(即ち律法に循いて献ぐる物)を欲せず、また悦ばず』と言い、⁹後に『視よ、我なんじの御意を行わんとて来る』と言い給えり。その後なる者を立てん為に、その先なる者を除き給うなり。

新約を立てるために旧約を除いた。

¹⁰この御意に適いてイエス・キリストの体の一たび献げられしに由りて我らは潔められたり。

一たび献げられたことによつて、我々はその贖罪をされたので、もう昔のような動物がどうのこうのとは違うんだと。キリストはそのような贖罪をされたということですよ。



11すべての祭司は毎日に立ちて事え、いつまでも罪を除くこと能わぬ同じ犠牲をしばしば献ぐ。12然れどキリストは罪のために一つの犠牲を献げて、限りなく神の右に坐し、13斯て己が仇の己が足台とせられん時を待ちたもう。14そは潔めらるる者を一つの供物にて限りなく全うし給うなり。15聖霊も亦われらに之を証して16『この日の後、われ彼らと立つる契約は是なり』と主いい給う。また「わが律法をその心に置き、その念に銘さん」と言い給いて、17『この後また彼らの罪と不法とを思い出でざるべし』と言いたもう。」（ヘブル10・1～17）

このヘブル書は大祭司の書と言ってもいい。7章から10章まではみんな大事なところですよ。いつペンヘブル書をよく読んでごらん下さい。よく分かるから。

「永遠の贖いをした」

という言葉がはつきり出ている。9章11節、

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、

十字架の事です。

12山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

十字架にかかつて、

永遠の贖いを終えたまえり。

というんだ。非常にはつきりしている。そして、

13もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、14まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。」（ヘブル9・11～14）

実存の力はキリストのこの贖罪と御霊の力によるというわけです。

